



17年度版「国語」五上 「千年の釘にいでむ」

新版教科書で こんな授業をしてみたい

新しい学習指導を考える会

内容別・テーマ別読書の導入で出会わせたい

五上「千年の釘^{くぎ}にいでむ」(内藤誠吾)

るに違いない。

このように、釘一つに対する古代の人々の知恵や工夫を学ばせると同時に、千年前、千年後と思いをはせ、職人としての努力をし続ける白鷹さんの生き方に触れることで、自分が初めて知ったことや感じたことを自分なりの言葉でまとめ、力を身につけさせたい。そして、この教材や学習活動を通して、歴史・文化・人の生き方に目を向けて、いろいろな本を読んでいくという態度を身につけさせたいと思う。

この教材は、「読書の世界を広げよう」という単元の導入の教材である。そこでわたしは、この教材から発展させて、読書の世界をより広げさせるために、子どもの読書量の実態や興味・関心に応じてテーマを工夫して設定し、グループでの読書発表会をさせたい。どういったテーマが考えられるかを子どもたちと相談して具体的に挙げておき、そのテーマの中のどれに入るのを意識させて本を選ばせるのである。例えば、「自然」「生物」「宇宙」のようないくつかの

この教材に出てくる白鷹^{しろたけ}幸伯^{しあき}さんは、わたしが勤務する学校の地域の方である。その身近な白鷹さんが紹介されているこの教材を読んで、驚いたことが二つある。

一つ目は、その白鷹さんが再現しようとした古代の釘には、実にさまざまな古代人の知恵が隠されているということである。鉄の純度・形・かたさの秘密についての説明が、わかりやすく書かれている。また、図を比較することで文章の内容がより明確にわかるように工夫されている。論理的思考力もつき始め、歴史や文化に興味をもち始めるこの時期の子どもに、古代の人々が作った釘の高度な技術に触れさせることは、知的好奇心を刺激するに違いない。

二つ目は、かじ職人の白鷹さんの心意気である。千年前のかじ職人に負けたくない、千年先のかじ職人に笑われたくないという思いで、古代の釘に近づくために何度も何度も研究を重ねている。名を残すことではなく、よい仕事を残したいという白鷹さんの強い思いに子どもたちも心を打たれ

あったり、「杉みき子」「椋鳩十」のように作者別であったり、「イチロー」「松坂大輔」「乙武洋匡」といった有名人別であったり、「冒険」「夢」「努力」「家族愛」「友情」などのようなテーマ別であったり、工夫して設定する。すると、単に読むのではなく、後で同じグループの友達と発表会をし、テーマについて話し合うのだという読みの目的がはっきりして、読み方にも深まりが出てくるだろう。同じことに興味をもつ者同士が自然と集まることにもなり、話しやすく楽しい発表会になると思われる。また、も一つ別の方法として、総合的な学習と関連させて、地域で偉業を成し遂げた人々の本を読んで、その生き方を学ぶという読書活動にもつなげていくことができると思う。

知識を得る読書にも、生き方を学ぶ読書にもつなげられる教材であると思う。

新版教科書でこんな授業をしてみたい

じっくりと作品の世界に読み浸らせたい

五下「わらぐつの中の神様」(杉 みき子)



17年度版「国語」五下 「わらぐつの中の神様」

この教材には、時代の違いや場所の違いを超えて迫りくる価値がある。それは、「値打ちある生き方とは何か」を問うもの、「人の幸せとは何か」につながるものである。働くことを愛し、人の身になって考え、人間の値打ちは外見ではなく心だと思っっているおみつさんと大工さんの織りなす、健康で素朴な愛の物語なのである。

おばあちゃんの優しい語り口調と方言の醸し出す雪国独特の世界が、理想的ともいえるこの愛の形を、無理なく読むものに届けてくれる。「みつたぐない。」とわらぐつを嫌うマサエ。子どもたちは、自身を見る思いで読むであろう。しかし、「心を込めて作ったものには神様が宿る。それを作った人も神様と同じ。」という象徴的な言葉が、子どもたちの心に一本の楔を打ち込む。贅沢を言わず、くるくるとよく働くおみつさん。雪けたを買つたためにわらぐつを編むひたむきな姿。大工さんの仕事に対する姿勢と考え方。子どもたちが、日ごろからそれほど意識しなかった大切な

ことへの思いが、心の奥底からふつふつと湧き上がってくるに違いない。

現在を生きる子どもたちの将来の夢が、「大工さん」に代表される「職人」に向けられ始めていることは、平成不況の中の当然の傾向であると同時に、自分自身の手で何かを創り出すことへの憧れであるのかもしれない。ますますコンピュータ化される世の中で、ゲーム遊びに心奪われている子どもたちにとって、この教材のもつ意義は大きいと考える。

また、この教材は、「人との出会いや触れ合いが人を成長させる」ことを教えてくれる。価値ある出会いとは、自分自身の価値観が生み出すものであることに子どもたちは気づくであろうし、先人の知恵に助けられて自分が成長させられていることにも気づいてほしいと思う。

このような内容的な価値をもつと同時に、この教材は、現在の場面の間におばあちゃんの昔語り(狭まる形)で構成されており、この独特な文章構成が作品の世界をよ

り深いものになっている。このような作品の特徴に着目させながら、物語における描写が人物像を豊かに描き出すことに気づかせ、登場人物の人物を中心に叙述に即して読む力をつけさせたい。

新学習指導要領に即して初めて作られた平成十四年度版の教科書では、読むことを中心にした単元にも他領域の活動が組み込まれていた。本教材でも、発表したり書いたりする活動が位置づけられており、読むことに充てられる時間が少なかった。

豊かな内容的価値をもつこの作品は、時間をかけてじっくり読み浸らせたい。幸い新しい教科書では、学習のねらいが読むことに絞られ、さらに時間も十分に配当されているので、子どもたちもじっくり作品に取り組むことができ、前に述べたような味わい深い読みの学習が展開できるだろうと期待している。



六上「カレーライス」(重松 清)



17年度版「国語」六上「カレーライス」

レシピ一 子どもが喜ぶ魅力的な料理
その理由は？

(1) 作品の構造
舞台は現代の家庭であり、主人公は小学六年生である。地の文が「ぼく」の視点で描かれていることもあり、子どもたちは、親近感をもって作品世界へ入っていきける。

(2) 作家の作風
評論家の北上次郎氏によれば、本教材の執筆者である重松清は、「さまざまな感情を、時には相反する感情を同時にもっていることを、いつも具体的なエピソードとともに描き出す」という。

「カレーライス」で描かれる「ぼく」の複雑な心情描写も例外ではない。思春期間近の子どもたちにとっては、共感できる部分も多いはずだ。

レシピ二 味付けはこれで決まり！
「やまなし」「や」「森へ」の特徴が優れた情景描写だとすれば、「カレーライス」の特徴は優れた心情描写である。

他教材とのバランスを考えたとうえで、本作品では登場人物の心情表現の読み取りを学習の中心とした。

レシピ三 調理方法
(1) 音楽を使おう

文章に音楽をつけるという授業はどうだろうか。教材を何度も音読するうちに、そんなことを思いついた。微妙な心情を描くこの作品には、音楽が聞こえてきそうな場面がいくつもあるのだ。

ドラマなどでは、時おり音楽が挿入される。登場人物の心情をわかりやすく表現するための演出である。物語にぴったりの音楽を当てはめるためには、主人公の心情変化を正確に読み取ることが求められる。

考えたのはこの作業を授業でやってみることだ。

教材としては、主人公の気持ちが大きく変化する場面がふさわしい。今回は、かぜで会社を早退した父と「ぼく」が話をする場面を選んでみた。

(2) まずは選曲してみよう
「主人公の気持ちはどのように変化しましたか。」従来の物語文の学習でよくみられる発問だ。この場合、本文中の記述を根拠にしながら、子どもたちは考えを書いたり発表したりする。

選曲するということはこの学習活動に似ている。ただし、音楽という身近なものを使う分だけ、子どもたちもより強い興味をもつだろう。

音楽を子どもたちに探させるのは難しいかもしれない。「ぼく」のわだかまりのよくなものが解けていく心情にぴったりの音楽。教師が用意した曲の中から班ごとに選曲するという形式も考えられる。

(3) タイミングを確かめよう
「気持ちが変わったのはどこですか。」これもよくみられる発問だ。音楽のタイミングを探するというのが、ちょうどこの作業に当たる。

まず自分たちが思うタイミングで音楽をかけてみる。「実験」結果はすぐに実感できる。違和感があったり予想以上にしっくりしたりすることに驚くはずだ。

このスピーディでダイレクトな反応を得られるのが音楽を使う利点である。より納得できるポイントを求め、子どもたちはやがて一つの言葉を吟味するようになる。「思わず」「思わず」という言葉が本文中にある。父の会話文の後、「ぼく」が初めて口を開く場

面だ。音楽を入れるタイミングとして、子どもたちが注目する場面の一つだろう。さて、どうしようか。二人の会話の間はどのくらいだろう。「思わず」とは間髪入れず重なるようにということだろうか。しばらく沈黙するということか。ならば、しばらくとは何秒くらいのことなのか。

このように、子どもたちの間で言葉の検討が始まる。何度も音楽をかけ直し、「実験」を繰り返すだろう。

「実験」を行ううちに、音量のことも気づくはずだ。音楽の挿入方法もフェードインとカットインではずいぶん印象が違う。言葉の検討をするうちに、心情変化が徐々に起こったのか突然起きたのかも検討することになるのだ。

レシピ四 おわりに
子どもたちは音楽が大好きである。ダンスやピアノを習っている子どもたくさんいる。合奏の練習をする子どもたちで、休憩時間の音楽室は大賑わいである。

音楽という新しい切り口が物語「カレーライス」の学習への意欲を高める手助けとなってくれることを期待している。

対比を実感させて筆者の主張を読み取らせたい

六上「生き物はつながりの中に」(中村桂子)



17年度版「国語」六上「生き物はつながりの中に」

一 自分という存在について考える
 わたしたちは、自分を「生き物」である意識することがどれくらいあるだろうか。さらに、「生き物」である意識することにはどんな意味があるかについてまで考えることは少ないのではないだろうか。そのような日常の中で、子どもたちが、自分が「生き物」であることを改めて意識し、「生き物」とはなんなのかを知ることは、友達や家族との関係、そして食生活など、身近な問題について考えさせるために大変重要なことである。そして、そこで考えたことは、環境問題など、地球上に生きるすべての生き物と共存していくために人間として考えなければならない大切な課題につながってくると思われる。

筆者がこの教材を通して読者に語りかけている内容は、この時期に教師も子どもたちといっしょに読み深め、考えていきたいことである。

二 対比事例に視点を当てる
 「生き物はつながりの中に」では、筆者は

対照的な二つの事物を対比しながら論を進めている。作品の中に対比事例を取り入れながら物事を説明するという叙述のしかたは、何かを主張しようとする時に効果的である。この場合、対比事例が巧みであるほどわかりやすい文章になるし、読み手に対して効果的である。読む側からすれば、使われている対比事例が妥当なものかどうかを検証しながら物事の本質をとらえる読み方を身につけておくことは、筆者の主張を理解するうえで大変重要であるといえる。

この作品では、「犬」と「大型ロボット」を対比させながら、「生き物」の特徴を押しさえよつとしている。そのうえで、「生き物」としての人間を、外界との「つながり」という側面と、生命の歴史という「つながり」の側面からとらえ、「かけがえのない一人人としての人」の存在について考えさせようとしている。

三 対比を実感するために
 この単元では、以下のような力をつけていきたい。

・対比事項を「相違」「共通」という観点でまとめ、筆者が何を主張したいか読み取る。
 ・筆者の意図に沿って文章を要約し、それに対する自分の考えをまとめる。
 本文では、前述したとおり、「つながり」という言葉に基づいた「対比」を核にして、論を展開している。そこで、「この学習に」「このような対比」が「筆者のどんな主張」に結び付くかを理解するための具体的な学習活動を取り入れてみてはどうかと考えている。つまり、「つながり」とは違う課題に基づいて、対比の有り様を実感し、そのことがどのような主張に結び付くかを体験させようとしているのである。

では、具体的にどのようにつなげるかという点である。「この」では、本文に従い、「犬」と「大型ロボット」との対比を「現代の人間生活にどちらが役立つか」という課題で論争させることを想定してみよう。いわゆる「犬猫論争」である。「相違点」を強調するところは、それぞれの現代生活に

生きつる特性を見いだすことにつながるし、「共通点」を強調することは、「現代の人間生活」に欠落している点や求められている点を明らかにすることにつながるであろう。また、「犬」も「大型ロボット」も「人」の存在にとっては「他」であるということも認識できるであろう。

もともと、「対比」には「この」のような幅広さが存在するのである。「この」したことを知ったうえで、筆者は「つながり」に視点を当てた論の展開をしているのである。叙述のしかたが、それぞれの特性の押さえ(視野の広い部分)から生き物の本質(論の核)へと展開していくのも妥当なところである。

このようにした経験を読みの中にも位置づけ、もう一度本文に立ち帰って筆者の主張を読むことが、「対比事例」を実感をもって読むことにつながる。わたしは考えている。さらに、本文中の「他」の意味する内容も「生き物」だけにとどまらず、「社会生活を行う人」に対しての「他」として考え直すことを可能にする。わたしは「とらえて」